

排出が徐々に治まっていき、一際大きな身体の震えが恥辱の時間の終わりを告げると、大きく吐き出された息と一緒にディーノの全身が弛緩していく。

その後少しの間を置いて、枕の下からすんすんと鼻を吸るような音が聞こえてきた。

途端、途轍もない罪悪感と後悔が己を襲う。

無理矢理お漏らしさせたのは、やはりやりすぎだったか。

どう謝罪したらいいものかと思案に暮れていると、あるものがふと目に入った。

「……………!!」

すっかり朱に色付いた両腿の間に広がる黄色いシミの上、そこに出来つつある粘着質で透明な液溜まり。

感じているのだ、ディーノは。

トイレ以外の場所でお漏らししてしまったというショックに噎びながらも。

眼前でゆっくりと溢れ続けている雫が示す『事実』に、内心どこかホッとするものを覚え、同時に鎮まりかけていた昂りが舞い戻ってくる。

割れ目の下奥でひっそりと息づく小さな穴から、また新たな雫がツゥと糸を引いて落ちるのを目にした瞬間、矢も盾も堪らず顔を近付け、尿に濡れたディーノの秘部に何の躊躇いもなく唇で触れていた。

「アッ……………え？ な、何!？」

突然の触感に、ディーノが枕の下からそろっと顔を覗かせる。

チラとだけ視線を送って、今度は大陰唇の片方を舌でペロツと舐めた。

「ひゃん！ って、え、待て、えっ？ ええっ!?! えええーっ!?!」

寸刻の後、自分の身に起こったことが信じられないといったような、動転した声が部屋に響く。

「ウン、だってソコ、オシッコ……………まさか、そんな……………」

必死に落ち着きを取り戻そうとしているのか、ディーノは続けて何やらぶつぶつと呟きだした。

そんな彼女にこれは現実だと告げるように、くちゅ……………と舌先を割れ目の間に挿し入れる。

「ンッ!? んアアッ!」

そのまま溝をなぞるように舐め上げると、リモンチェッロみたいな甘くて強い味が舌を灼いた。

(これが、ディーノの……………オシッコの味……………)

排泄物を口に行っているという事に嫌悪感はなくなく、むしろ美酒に惹かれるように再び舌を滑り込ませると、今度はゆっくり味わいながら舐め拘っていく。

(舌に痺れる感じがたまんねえ……………)

そんなことを思いつつ、もう一度、舌を伸ばしたところで、ポフツという軽い衝撃が頭に走った。